

聞くということ，味わうということ

——モニク・トゥルン氏の講演を聞いて——

下條恵子

ガートルード・スタインとアリス・B・トクラスのヴェトナム人料理人ビンの物語 *The Book of Salt* (2003)，そして言葉を聞くあるいは話すとき味覚が作動し味を感じ取ってしまう共感覚の持ち主リンダの物語 *Bitter in the Mouth* (2010) ——モニク・トゥルン氏の作品はいずれも食と言葉の興味深い関係性を強く意識させるものである。

人は残酷に振る舞う時にも人間性を求められるというのが彼女〔トクラス〕の信条なのだ。他の行為でも彼女が同じことを求めているのをわたしは承知している。つまり、包丁を手にしていても、刃が**恵みの一撃** (coup de grace) を与えるのなら、構わないというわけだ。この「恵みの一撃」という言い回しが、わたし好みのフランス語であることは認めておかなければならない。(中略) 何かをあからさまにしないことを目的とする、実にフランス的とも思える屈折した表現であり、部外者には軽蔑と残酷さのようにしか聞こえないものだ。(*The Book of Salt* 69 強調原文) ¹⁾

ちなみにガートルードスタインのフランス語は、まあ、ありがちなレベルと言えよう。吹き抜けの階段を片方の靴だけがガラガラと落ちてゆく音を思い浮かべればよい。完全にリズムが狂っていて、近づくほどうるさく耳触りになるといった音だ。その一方でガートルードスタインは、自分の露骨なアメリカ訛りを限りなく気に入っている。ちょうど彼女が好んで身につけている堂々とした趣きのモザイクのブローチと同様に、必須の装飾品というわけだ。(*The Book of Salt* 33)

ビンの料理に対する繊細で鋭い洞察力はフランスの言語文化に対する考察、そして彼のアメリカ人女主人ガートルード・スタインのフランス語に対する考察の場面でも遺憾なく発揮されている。一方共感覚を持つリンダの場合、彼女にとっての言葉は「リンダ (ミント)、イギリス人たち (マラスキーノチェリー) が最初に (ペプト・ビスモル胃腸薬) ノース (チェダーチーズ)・カロライナ (缶詰豆) に入植した (マスタード) のはいつ?」と変換されてしまう。見て取れるようにリンダが知覚する味はアメリカの高度に産業化された加工食品のそれであり、つまりヴェトナム戦争の混乱を逃れて渡米してきたリンダが受け入れなくてはならなかったアメリカ文化の味なのである。

『ひと皿の小説案内—主人公たちが食べた50の食事』の中でダイナ・フリードは読むことと、食べるものの関係性について、以下のように述べている——「読むことと食べることはもともと相性がいい。共通点が多いのです。読むのは摂取です。食べるのも摂取。どちらも心地がい

いし、栄養を得られるし、健康や体力を回復させてくれる。(中略) 元気にもなるし、眠くもなる。食べ物にしても本にしても、内容の濃いものは時間をかけてちゃんと消化する必要があります」(『ひと皿の小説案内』8)。この関係を分かりやすく示す英語表現に“Devouring books”(「本を貪り読む」devour= 貪り食う、の意)がある。トゥルン氏も子ども時代の英語での読書体験を語ったエッセイの中でこの表現を使用しているが(“Our First Steps” 22)、実際、文学の世界では食べ物を摂取することは物語を読むことの比喩、さらには新しい知識や異なる理念を取り入れる比喩として用いられることが確かに多い。今回は立命館大学のすぐ近くを舞台とした三島由紀夫の小説『金閣寺』からの一例を見てみよう：

われわれはお薄茶をいただき、ついぞ喰べたこともない西洋の干菓子のようなものを喰べた。緊張すればするほど、粉が際限もなく、私の光っている黒サージの膝にこぼれた。(『金閣寺』36)

この小説の語り手「溝口」は僧侶の息子であり、吃音という軽い言語障害に苦しんでいる若者である。上の引用はこの溝口が父とともに初めて憧れの金閣寺を訪ね、そこで今まで食べたこともない西洋のお菓子を食べこぼす、という場面である。今まで自分の心の中に崇高な美しい金閣寺のイメージを築き上げてきた溝口は、それほど印象的でない実際の金閣寺をどう受け入れるべきか分からずにうろたえている。自分にとって「異国」のお菓子をうまく食べることができない溝口を描いたこのシーンは、彼が抱く更に重苦しい問題、つまり彼が自分の中の理念と現実世界をつなぐための言葉を見つけることができない、という問題を集約するような場面になっているのである。

これらのことを念頭において、ここからはトゥルン氏の *Bitter in the Mouth* を取り上げながら食と言葉にまつわるいくつかのことを考察してみたい。この小説の語り手であり主人公であるリンダは言葉を聞くと味覚が作動し、味を感じ取ってしまうという共感覚の持ち主である。たとえば「リンダ」という言葉を聞いたり発したりすると彼女の口の中にはミントの味が広がるという。リンダはときにこの共感覚を麻痺させるために煙草を吸い、またあるときは、言葉がもたらす味覚を味わいたいと切望するのである。

私はときにただただ言葉を欲することがあった。その言葉のことを考えながらベッドに入り、夢の中で誰かがその言葉を発してくれるだろうと考えるのである。翌朝、私の頭に最初に浮かぶのがその言葉で、一日中「その言葉が聞けないかな」と思って過ごす。昔から、そして今でも私にとって「その言葉を誰かが発するのを聞くこと」と「自分で発すること」の間にははっきりとした違いがある。同じ味を感じ取ることには違いないのだけれども。その違いとは、おいしい食事をふるまってもらふことと、自分のために自分で作らなければいけないことの間にある違いだ。(*Bitter in the Mouth* 102)

この部分が非常に興味深いのは、リンダは言葉を発することよりも聞くことをより好んでいる、という示唆になっているからである。ただ、ここで誤解してはいけないのは、リンダは受

動的な声なき者として描かれているわけではない、という点である。*The Book of Salt*のビン同様、リンダも鋭い洞察力を発揮しながら、戦争や人種、セクシュアリティといった複雑な自分史を巧みに語っていく優れた語り手なのである。そのうえで、彼女は「書き手」や「話し手」ではなく、自分の立場を「聞き手」として認識しているように思えるのである。また、「良い聞き手 (a good listener)」であることは、この小説の中では人物評価の場面で登場する重要な価値基準となっていることにも注目しておくべきであろう。リンダはいずれひどい別れを経験する恋人レオとの出会いを「じきに精神科医になる人としては、彼はあまり良い聞き手とは言えなかった」(*Bitter in the Mouth* 173)と回想し、その後訪れる関係性の破たんを予示している。*The Book of Salt*のビンとは異なり、リンダが英語に苦勞している場面は描かれていないが、彼女はつねに新たな言語を自分の中に取り入れようとする人物として描かれている。それは彼女が故郷ノース・カロライナを離れてイエール大学に進学して学んだアカデミックな言説であり、またコロンビア大学法科大学院、そしてニューヨークの弁護士事務所で学んだ「法律用語 (legalese)」などとなって登場する。

法律は私に完全に新しい語彙を授けてくれた。弁護士でない人たちが嘲笑的に「難解な法律用語」と呼ぶものである。私に地下鉄から職場までの通勤路を往復させるような基本的構成単位をなす日常語とは違い、法律の語彙はたいていの場合、ボイリングスプリングを離れて経験した味、私自身が選びとった味、ディアンヌのキッチンにある箱詰・缶詰食品のものでは決してない味を引き起こすのであった。

召喚状 (キウイフルーツ)

差止め命令 (カマンベールチーズ)

法規違反 (ロブスター)・・・(後略) (*Bitter in the Mouth* 193)

フランスの哲学者であるドゥルーズとガタリは、口・舌・歯というものは原初的に食べ物を摂取するために存在する領域であり、言葉を発すること、つまり食事という選択肢を捨て、発話を選ぶことは一種の断食である、という理論づけを行なった。彼らが例に挙げたフランツ・カフカの『断食芸人』やハーマン・メルヴィルの短編『パートルビー』の主人公たちは、文学研究者たちの間では作家や詩人の比喩だとみなされることが実に多いのである。これらの人物たちとは違い、リンダは言葉への飢えは感じながらも、断食をすることはなく、聞いたこと、読んだもの、見たもの、口の中に感じた味を彼女なりの方法で語っていくのである。

今回の講演の中でトゥルン氏は、妻から何度も納得いくまで怪談を聞かせてもらったラフカディオ・ハーンを「話を聞く名人 (master listener)」だと評していたが、*The Book of Salt*のビンも *Bitter in the Mouth* のリンダも、トゥルン氏が描く「話を聞く名人」のひとりであると言えるだろう。ビンやリンダはそこに聞くべき言葉、読むべき物語があれば、それが塩っぼくても苦くてもそれをじっくりと注意深く味わうことのできる人物なのではないだろうか。

それでは、私からもトゥルン氏への質問をしてコメントを締めくくりたい：

食べ物の描写に加えて、トゥルン氏の作品でもう一つ特徴的なものが歴史上実在した人々を物語に登場させる、という点だと思います。ガートルード・スタインや、ヴァージニア・デア、そしてラフカディオ・ハーンといった人々です。歴史上の実際にあった話というのは、トゥルン氏の執筆の中でどのような役割を果たしているのでしょうか、また実在の人物を小説の中に取り入れるということはトゥルン氏にとって「歴史を聞く・読む」という行為の一種なのでしょうか。

注

- 1) *The Book of Salt* の和訳については小林富久子訳『ブック・オブ・ソルト』（彩流社、2012年）を使用させていただいた。*Bitter in the Mouth* については和訳版未刊行のため、拙訳である。

Bibliography

- ジル・ドゥルーズ、フェリックス・ガタリ『カフカーマイナー文学のために』宇波彰、岩田行一訳、法政大学出版、2000年。
- ダイナ・フリード『ひと皿の小説案内—主人公たちが食べた50の食事』阿部公彦監修・翻訳、マール社、2015年。
- 三島由紀夫『金閣寺』新潮文庫、2011年。
- Truong, Monique. *Bitter in the Mouth*. 2010. New York: Random, 2011. Print.
- . *The Book of Salt*. 2003. London: Vintage, 2004. Print.
- . "Our First Steps." *Amazing Place: What North Carolina Means to Writers*. Ed. Marianne Gingher. Chapel Hill: U of North Carolina P, 2015. 19-25. Print.